

室内は台形や三角形、
住みこなし、使いこなす
過程で、工夫、発見が

千葉学と、鎌倉七里・ 風の谿プロジェクト

「海に対する、一枚のサーフボード」のような
インターフェイスで、環境と対話するよつな。

取材・構成・文 | TOKO
edit by TOKO

撮影 | 滝口保
photo by TAKI

その小説はどんな小説か？ は、それを書いた小説家はどんな人か？、とほぼ同じ命題であることは、建築と建築家のあいだにも言える。
彼がその家を建てるに至るは、彼の半生を通じての、人生の事情、情念や夢の結果であるはずだ。それらが欠けた記事は、ハードウェアとしての住宅紹介に過ぎない。建築家のbiographyを横糸に、その建築を語る「よつな」家」はより深く、本質的に見えてくるとは思う。つまり、「Architect biography」は、建築家のインタビュー記事ではなく、新たな文脈で住宅を語る「フォーマット」である。

動物がつくる巣のような、環境を慎重に読み取った、
プリミティブな建築、をつくりたい。



右上) グーフィーの千葉にとって七里正面はいちばん大切なブレイク。その真正面、個人的にも特別なプロジェクトである 右下) 切り通しによって、建築のどこにいても、七里の海、山が新しい風景となって 目に入る 左) 計画は斬新だが同時に、外装仕上げをあえてラフにするなど、昔からここに建っていたかのような建築になるよう配慮

物件概要

正式仮称 The Weekend House[®] alley ; 七里ヶ浜、行合橋西詰めビーチフロント。商業施設・賃貸住宅。敷地面積2436㎡、延べ床面積約2600㎡。鎌倉の山々の路のように「切り通し」が設けられ、風が渡り、光りが変わり、建築のどこにいても、鎌倉の海と山が見える。3月中旬竣工予定。



風が渡り、プリズムのように光りが変化する、切り通しを主題とした計画。正面2Fには、朝が早いサーファーのため、朝食を出すレストランが入れば素敵だ



室内は台形や三角形、だからこそ、猫みたいに、ここが不思議によく眠れるとか、発見があり、暮らしが面白い。

「別の言い方をすればね、野球のルールのようなデザインをしたいんですよ。」と千葉氏は続けた。

野球のルール？

そう、ルール。

いわば「闘値」だけ決めて、あとはプレイヤー、建築でいえば住人や使う人の自由に任せる。その自由度は、闘値の設計次第なんです。

たとえば、ピッチャーマウンドとキャッチャーがあと3m遠ければ、いかに150kmの速球でもほかすか打たれてゲームにならないし、3m近ければ誰も打てない。塁間が現在の距離だから、クロスプレーが生まれてゲームがおもしろくなる。

ルールがある一方で、プレーは原則的に選手の自由に任せる。バットの振り方とかいちいち規定しない。だからこそ、イチローとか松井とか、創造性や個性が生まれる。

誰が考えたのか、野球のルールは、野球に限らずサッカーでもテニスでも、スポーツのルールはよくデザインされ

った自然だから、海とはまた違った魅力をみつけよう。

環境に呼吸しながら、建築のなかは洞窟のようにざっくりつくる。機能を割り当てることはしない。だからこそ、猫みたいに、ここがこつこつと気持ちいいとか、ここが不思議によく眠れるとか、発見があり、暮らしがいきいきする。

住宅も、クルマのようにパッケージ化、気密化して、ボタンひとつで完全空調、24時間強制換気、みたいな流れが一方であります。それはそれで快適ですが、多少寒かったりしても、天窓越しの夕焼けの色に感動したり、漏れてきた風に、雨上がりの匂いを感じたり、ああ、こつこつとこんなに気持ちよかつたんだと、環境と「出会える」家のほうが、僕は 快適だと思いませんね。

千葉氏の、そういう「哲学」のかたちの一つがこの七里・風の谿プロジェクト、正式仮称はaieya（切り通しの意）店舗と賃貸住宅で、3月中旬竣工予定である。

七里の正面、行合橋の西、工事中の物件を見て、気になっている向きも多からうが、詳細は後述。

その前に、どのような経緯で、千葉氏はその能力を、哲学をもつに至ったのか。

60年、東京に生まれた。父は日活の黄金期、美術監督を務め、

ているんです。

建築もそうあるべき、と思うんですよ……と、言っただけじゃ分かりませんよね（笑）

鳥が巣をつくりますよね。それは天敵に襲われにくいとか、餌をとりやすいとか水はけがいいとか、本能的かつすごく慎重に場所を選んで、もつとも合理的な営巣をしているはずなんです。クロマニヨン人も、安全で快適そうな洞窟を選んで住んでしょ。

現代人は彼らのようにはゆきません。住みつる場所も制限されますが、僕は極言すると現代の住居も「巣」のよう

「黒部の太陽」など大作名作多数を手がけた。

幼い千葉少年は父に連れられ、よく調布の撮影所に出かけ、石原裕次郎や吉永小百合に頭を撫でられた。穴戸錠にはことにかわいがられたらしい。

CGなどない時代である。現場で、手技で、発想で、チームワークで、ものをつくってゆく姿を、少年は心に焼き付けた。自身、図画工作と音楽が得意で、将来は父のような、何らかの創作的な仕事をしたいと、漠然と夢を描いていた。

後、父は70年の大阪万博プロデューサーに転進。岡本太郎とも懇意で、千葉少年は、太陽の塔、や日本政府館が建ちあがってゆく過程をつぶさに見た。万博閉幕後、跡地での、黒川紀章の設計になる民族学博物館建立にも、父は携わり、少年は建築家の仕事を肌で感じた。

それらはマクロなトピックなのだがミクロなそれもある。同時期、世田谷の実家を増築したのだが、大工の仕事を飽きず眺めていた。これらの手技が具体的な構造になってゆく過程が面白く、一時は飛びきりの大工になろうと思っていた。

中学に上がる頃には、建築家に考えたことを、現実の空間として残す仕事をする人に、なることと決めていた。

そのために最善と考えられるステップとして、丹下健三を始め、磯崎新、伊東豊雄ら錚々たる建築家を輩出して

でいい、その方が楽しい、と思う。雨風をしのいだり、防犯とか、シェルターの機能は必要ですが、与えられた環境に対して、「開き」、敏感に呼吸して、光、風、湿気も匂いも取り入れる。このような海辺や、森の中に限らず、都市でもね。都市も、ヒトがつく

いる東京大学工学部建築学科を目指す。

一浪後、無事合格。その講義は期待に違わず、建築士養成のなそれではなく、徹底して「デザイン」を考えさせられた。たとえば、当時の教授、横文彦（モダンイズムの代表的作家、東京体育館、幕張メッセなど）には、その空間を旅するように「デザインせよ」と教えられた。

東大大学院に進み、87年修了。日本設計に7年勤務し、独立。2001年、千葉学建築計画事務所設立。東京大学大学院准教授。近年ますます多忙で、その仕事は内外で注目されている。

筆者（トコ）は、この20余年、あらゆる職種の方々、プロスポーツ選手、市会議員、日産の技師、ドトール経営者、美容整形外科医、サーフボードシェイパー……を取材してきたが、ことに建築家は、特異的に話しか面白く、魅力的な人物が多い。

かれらは、人間も、社会も分らないと仕事が出来ず、具体性と抽象性を併せ持っている。

工学的な素養はほんの前提で、クライアントの生活シナリオを描くという意味では文学的、カウンセラー的能力も要る。建築は受注生産で、試作できず、つねに一発勝負で、目に見えず、触れないものを、数千万、数億円を買ってもらうにはならない。そのためのプレゼンテーション能力。コミュニケーション能力を前提とした施工チーム

統率力も必要だ。

竣工した建築はそして、デリートもアンドウもできず、その結果を、何十年にもわたって評価され続ける。

生き残り、名を成している建築家すべてはそれら総合力を有している。

千葉学を形成した要素の重要なひとつに、ネイチャースポーツがある。

10歳にして、通っていたYMC Aのリーダーのお兄さんによって、自転車に出会った。自転車も、風とテレイン（地形）のネイチャースポーツといっでいいだろう。中学にあがると自らラウンドナーを組みツーリングするようになり、ロードバイクでレースを始めた。47歳の現在もロードバイクにまたがっている。

大学入学、ヨットを少しかじり、ニユースポーツとしてハワイから輸入されたウインドサーフィンを始めた。79年のことである。鎌倉、逗子、葉山まで走っても数艇も見なかったというから、バイオニアのひとりといっでいい。

千葉はすぐに魅了されてしまった。そのシンプルさとダイレクトさ、力学的原理と効率に。

ヨットも風で走るが、風の力は、じつはあまり感じない。セイルパワーは体ではなく船体に伝わる。

ウインドサーフィンは、セイルパワーを体でボードに伝える。足裏で直接スピードによって変わる海面の硬さをカービングするとそのソリッドな弾



敷地と1階平面図。正面はR134、水平線が広がる。海だけではなく、鎌倉の山々も、贈り物のように感じられる

道具だてがシンプルになるほど、自然からの入力が増し、自然とより対話できるようになる。

力を感じる。自然とのかかわりがよりダイレクトなのだ。

千葉はウェイブライディングに夢中になり、吹けば必ず、講義をふけ、坂の下か材木座にいた。ウインドのプロに、何やってる人なんですか、と聞かれた。当時、フロントでクリーンなオフザリップを決めるウェイブライダーはそうおらず、シヨップに、ライダーにならないかと誘われたこともあった。社会人になって 休日に波つぎで風が吹くとは限らないので サーフインを始めた。セイルが無くなり、スビードと機動力は失われたが、海との関係は濃くなった。

脚に感じる海水温 ポトムとフェイスの表面張力差、リップのパワー……。手がブームから、足がストラップから解放され、自由になり、創造性が生まれた。

ヨット ウインド 波乗りと、道具だてがシンプルになるほど、自然からの入力が増し、自然とより対話できるようになった。

ならば裸で泳げばいい？
それは違う。
イルカではない、そこはヒトなのだ。

サーフボードという道具が介入するからより楽しいのだ。

「海に対するサーフボード的なインターフェイスで、環境と対話するような建築、を千葉は考えるようになった。

“alley”の施主はサーファーである。この地に宿る神を感じる建築家を探し、千葉に依頼した。

千葉にとってもこの場所は特別だった。グーフィーのかれにとつては、七里正面が、いちばん愛着あるブレイクだった。その真正面の立地である。

第一に、海と山が迫る鎌倉らしい地勢に、サーフィンクラシックたる歴史に、なじむ建築にしようと思った。が、それらを尊重するだけに終わらず、そこから新しいものが生まれる、何らかのハイブリッドを実現しようと思った。鎌倉自身、伝統に、常に新しいなにかを加え 波乗りもそのひとつだ。その魅力を高めてきたのだから。

文で説明するより、前掲の模型写真を見てもらう方が早い。
鎌倉の山々の谿のように、「切り通し」が設けられている。風が渡り、太陽の位置によってプリズムのように光りがかわる。

切り通しによって、建築のどこにいても、鎌倉の海と山が見える。切り通しによって切り取られることにより、新たな風景が 環境との「対話」が生まれる。

切り通しによって、店舗、住宅となる個々のユニットは、台形や三角形。



駐車場を広く、中庭を設けた初期のプラン。1年半の準備期間中、「300プランは作って」最終案に辿り着いた

10歳の時から自転車を偏愛。この日は鎌倉で並行進行中の物件間をロードレーサーで移動

使い、住みこなすのに クロマニヨン人が洞窟で考えたように 工夫が必要だ。

外観はエッジが立って近代的だが、コンクリート打ち放しの外壁は再生型枠を使い、ラフでランダムな仕上げに昔からここに建っていたかのように。

切り通しの「路地」は、たとえば根津干駄木のそのように、住民が鉢植えを置いたり、猫が寝み着いたり、観光客だけではなく地元のおばちゃんやランチを食べに来たり、そんなふうな「生活」が根付けばいいと思っている。

竣工予定は3月中旬。レストランや店舗のテナントオープンもGW前になる見込みである。

一部は賃貸住宅となるが、200㎡の物件などは、このロケーションを勘案すると賃料100万を越えるのではないかと。オープンすれば、ヒルズ的なステイタスと湘南ウォーカー的な観光名所として注目されるだろうが、千葉はしかし、そういう場としてのみ機能させたくないと考えている。

「OBYA」がテナントとして入ることが決定している。サーフボードショップ エイバー 出川三千男氏の店だ。千葉とは、大学時代、ウインドのウェイブボードを削ってもらって以来のつきあい。今も波乗りの師匠である。

出川氏、alley「アドバイザー」のひとりでもある。

千葉は まだ夢想段階だが 出川氏と、こんな構想を練っている。ここで、地元の子どもたちを集めて「こども日曜教室」を開けまいか。

千葉には、10歳の時、YMCAのお兄さんに、自転車を教えてもらった素敵な思い出がある。自転車だけでなくお母さんがつくってくれたお弁当を残しちやいけなとか。教えはじぶんの人生をいい方向に導いてくれた。

日曜日の朝、子どもたちとともに朝食を摂り、波があれば出川センセイが波乗りを教え、なければ千葉センセイが自転車で引率し鎌倉近代美術館や古刹に行き、建築を教える……。

ちばまなぶ

建築家。千葉学建築計画事務所主宰。東京大学大学院准教授。60年、東京生まれ。東京大学工学部建築学科、同大学院修了。日本設計を経て、01年独立、現在に至る。受賞多数。近年ますます多忙でその仕事は内外で注目を浴びている。
http://www.chibamanabu.jp